

『失われた時を求めて』における「『ル・フィガロ』掲載記事」(1)  
——『ゴンクール未発表日記』の模作」とのかかわりにおいて——

山 崎 俊 明

序

マルセル・ブルーストの未完の小説『失われた時を求めて』<sup>1)</sup>において、話者の最初の公的文学活動は、『ル・フィガロ』紙に掲載された「記事」であり、「記事」掲載日の様子とその後の若干の反響が描かれている（nP. IV, 148-171）が、「記事」そのものは小説に現れていない。小説の最終章で、作家としての天職確信に到るはずの話者にとって、「記事」の掲載は重要な体験であるにも拘らず、なぜ「記事」は描かれていないのか。その理由を中野知律氏は生成学的見地から検討し、ブルーストは、小説を書き進めていくうちに最終場面での話者の「小説家となる決意」を際立たせる意図を強めたので、「記事」に関するテキストも含め、死後刊行の未定稿<sup>2)</sup>に存在する話者が書いたとされる文章は全て消え行く運命だったからだとした。それゆえ中野氏は、「記事」に関わるテキストの生成過程の終点を、『逃げ去る女』から「記事」掲載に関する部分が削除されて『消え去ったアルベルチーヌ』<sup>3)</sup>が作成されたことに見た<sup>4)</sup>のだが、この部分が小説中の他の場所に描かれる予定だったかもしれないという点にも言及している<sup>5)</sup>。実際、「記事」掲載日が描かれた部分を『消え去ったアルベルチーヌ』の続巻<sup>6)</sup>に描くことを、ブルーストが死の直前（1922年11月18日）にメモしていたことが、中野氏の論文発表後、ナタリー・モーリアック＝ダイヤー氏によって公表された<sup>7)</sup>のだ。このメモの有効性を信じるならば、「記事」そのものが小説に描かれていないのは、ブルーストが「記事」そのものを書き終える前に亡くなった

(1922年11月18日) からだとはいえられまいか。では、この「記事」の正体はどのようなものだったのか。

この問題に入る前に、「記事掲載の反響」に関するテキストの校訂版の現状に触れておかねばなるまい。なぜなら、今しがた見たように、「記事掲載日」に関する部分が削除された校訂版が存在するからだ。

現在、この部分に関係する校訂版は四種類ある。ブルーストが『逃げ去る女』を巻の題として考えていたテキストをタイプさせた際<sup>8)</sup>、カーボン紙によって得た「写し」に、後に修正が施されたものを校訂したものを主たるテキストとしたものがあり、新ブレイアッド版がその代表である。

この版に対してモーリアック＝ダイヤー氏は、小説の一部としての「正真性 *authenticité*」を認めない。「写し」に施された修正にブルーストの手が一切入っていないことをその理由の一つとしているのである。また、新ブレイアッド版は題として『消え去ったアルベルチーヌ』を掲げているが、この点についてもモーリアック＝ダイヤー氏は認めず、タイプ原稿そのものにブルースト自身の手による加筆・訂正・削除が施されたテキストのみが、すなわち、1986年に、モーリアック家の書庫から見出されたタイプ原稿（オリジナル）のみが『消え去ったアルベルチーヌ』の題を有する資格があるとした。このタイプ原稿（オリジナル）への加筆・訂正・削除が、ブルーストの存命中になされ、その時期が書簡に現れた名称決定時期と重なることを根拠としているのである。この、「記事」掲載日を描いた部分が削除された『消え去ったアルベルチーヌ』は、『ソドムとゴモラⅢ』の名の下に、『囚われの女』と一体をなすことをモーリアック＝ダイヤー氏は書簡等を根拠に主張している<sup>9)</sup>。一方、新ブレイアッド版こそ小説の正当な一部に相応しいとする意見もジョバンニ・マッキア、ピエール＝エドモン・ロベール、徳田陽彦氏らから提出されている<sup>10)</sup>。

校訂版第三の代表例として、タイプ原稿（オリジナル）が発見される前に刊行されたもので、タイプ原稿の元である清書カイエを校訂した、ジャ

ン・ミー Jean Milly氏による『逃げ去る女』（Garnier-Flammarion, 1986）がある。校訂するテキストとして清書カイエを選んだ理由として、タイプ原稿（写し）にブルーストの手が入っていないことを挙げている（*ibid.*, p.45）。

なおミー氏は、『消え去ったアルベルチーナ』（タイプ原稿オリジナル）に『逃げ去る女』（清書カイエ）を取り込み、『消え去ったアルベルチーナ』の無削除版として刊行している（Champion, 1992）。これが第四の校訂版である。

本論では、モーリアック＝ダイヤー氏が公表した「封筒メモ」の有効性を部分的には認めることになるのだが、彼女の校訂版の「正真性」を認めただけではない。その理由として、例えば、ヴェネチアに関する削除部分について生じる様々な疑問（なぜ削除されたのか、他の場所へ移動させる予定だったのか、だとすればどこに、等々）に対する説得的な解釈がまだ提出されていないことが挙げられよう。

さて、「記事」の正体として、話者が少年時代に書いた描写文である「マルタンヴィルの鐘塔」<sup>11)</sup>を修正したものが小説中で言及されてはいる<sup>12)</sup>が、明らかに「記事」と「マルタンヴィル」との関連を否定する記述も存在するのだ。例えば、画家エルスチールの名を「記事」の中で言及した、という話者の言葉<sup>13)</sup>である。「マルタンヴィル」の中に「エルスチール」の名はない。本論では、この、「記事」と「エルスチールの名」とが現れる「記事掲載の反響」に関する部分を取り扱い、「記事」の正体を検討するのであるが、その際、新プレイアッド版を用いる。というのは、この部分が、先に見たように、モーリアック＝ダイヤー版においては削除されているからであり、また、この部分は、生成過程において、かなり限られた期間（1922年前半）に、「タイプ原稿」という比較的定まった形で作成されたもの<sup>14)</sup>の「カーボン」による「写し」なので、修正部分等を除けば、「タイプ原稿オリジナル」そのものと全く同じ物だからだ。とはいえ、上に述べた事情も考慮し他の校訂版も参照したことは言うまでもない。

では具体的にテキストに目を向けてみよう。「記事」掲載の当日に、話者はゲルマント侯爵夫人 Duchesse de Guermantes に「記事」の感想を尋ねに行く (nP. IV, 152) が、侯爵邸では登場人物達が「記事」を巡って不可解な言動を示す。プルーストはこの「不可解な言動」を、「記事」そのものを示唆する指標として組み込んだのではないか。「記事」に関する「具体的細部」をゲルマント侯爵 Duc de Guermantes に指摘させていることから、プルーストは「記事」そのものを具体的に想定していたと思われる。あるいは既に書いていた原稿に、これらの「不可解な言動」や「具体的細部」を呼応させることによって、その原稿を「記事」へ書き変える計画を抱いていたのではなからうか。問題となる原稿、すなわち書き直されて「記事」となる運命にあったテキストが、『見出された時』冒頭に位置する『ゴンクール未発表日記』模作<sup>15)</sup>ではないかという仮説を我々は得るに到った。つまり、話者が偽ゴンクールとなり、ヴェルデュラン家の夜会の様子を『ゴンクール未発表日記』模作 (nP. IV, 287-295) として描いたものが、『ル・フィガロ』紙に掲載される予定だったのではないかと考えられるのだ (残された原稿の上では、ゴンクールが書いたことになっている『日記』 [=「模作」] を話者が読むことになっている)。

もとより、「記事」が「模作」であることは明言されておらず、加えて、「ゲルマント邸」の場面に描かれた不可解な要素を、プルーストが、「記事」が「模作」であることの「伏線」として書き込んだことを証明するのが本論の目標である以上、我々は二重に不確かな領域を対象とすることになる。しかし、様々な「状況証拠」を検討した結果、プルーストは死の直前に、「記事」を「模作」として構想していたのではないかと、という仮説を我々は得るに到った。以下、その検証結果を示し、この仮説の有効性を問うてみたい。

## I. 「記事」に関する不可解な要素

### I-1. エルスチールの名

話者は、エルスチールの名を契機に、自分の「記事」が『ル・フィガロ』

に掲載されたことを口に出す。

「エルスチールと言えば、『ル・フィガロ』の記事の中で、私は彼の名を挙げたのですが、お読みになりましたか。」<sup>16)</sup>

エルスチールの名を『ゴンクール未発表日記』模作」の中に見出す（nP. IV, 292-293）ことはたやすい。しかし、単に名前の呼応のみならず、エルスチールはより複雑な方法によっても、「模作」との密接な関係を示唆しているのではないか。話者の口から『ル・フィガロ』の名が発せられた時のゲルマント侯爵の反応にそれを探ってみよう。

### 1-1-2. 侯爵の反応、「いやそれは私の従姉だ」

「あなたが記事を『ル・フィガロ』に書いたですって？」ゲルマント侯爵は、「いやそれは私の従姉だ」と叫びでもしたかのように荒々しく叫んだ。」<sup>17)</sup>

何故「いやそれは私の従姉だ」と叫びでもしたかのように荒々しく叫んだ」という表現が用いられたのだろうか。この謎を解く鍵として、ブルーストは、この侯爵の反応の直前に、「ゲルマント侯爵夫人 Duchesse de Guermentes」が、侯爵の「従姉」である「ゲルマント大公夫人 Princesse de Guermentes」に多くの「エルスチール」を譲った」ことを話者に言わせている（nP. IV, 163）ようだ。実際、話者は以前に侯爵邸で二枚のエルスチールの絵を見ており（nP. II, 713）、『X家の肖像 Portrait de la famille X』を含むその二枚がゲルマント大公夫人に譲られ、その後、彼女がそれらをリュクサンブール美術館に寄贈したことも語っている（nP. III, 905-906）。これらの事実から、我々は、ゲルマント大公夫人とヴェルデュラン夫人とが、エルスチールの絵を巡って奇妙な関係にあることに気づく。という

のも、「模作」では、ゲルマント大公爵夫人ではなく、ヴェルデュラン夫人が、『コタール家の肖像 La Famille Cottard』<sup>18)</sup>を所有し、さらにそれをリュクサンブール美術館に寄贈したことになっている (nP. IV, 293) からだ。ここで一つの疑問が生じる。『X家の肖像』は『コタール家の肖像』ではないのか。

実際、『コタール家の肖像』が『X家の肖像』であることが記された、「模作」に関する草稿<sup>19)</sup>が存在することを考慮すれば、ブルーストは、一枚の肖像画の所有・贈与に関する人物を、小説そのものの流れにおいてはゲルマント大公爵夫人とし、「模作」においてはヴェルデュラン夫人としたという矛盾が浮かび上がる<sup>20)</sup>。

この矛盾こそが、「記事」が「模作」であることを示す有力な証拠ではなからうか。そしてそれを示唆するために、侯爵の反応に「いやそれは私の従姉だ」と叫びでもしたかのような荒々しさ」という表現が用いられたのではないか。というのは「記事」が「模作」であるとすれば、そして、「侯爵がその「記事」を読んでいるかもしれない」と話者が想像していたとすれば、実は「模作」であるところの「記事」の中で、ヴェルデュラン夫人が「エルスチール」の所有・贈与に関係しているの、「記事」が掲載された『ル・フィガロ』の名を聞くや否や、侯爵が実際の当事者である「従姉」の正当性を「荒々しく叫んだかのように」話者が思ったのも当然だからだ<sup>21)</sup>。

## I-2. ブロックの言葉、「午後五時のお茶会」と「聖水盤」

さらに、「記事」と「模作」との関連を否定できない場面がある。「記事」掲載の数年後、話者の友人ブロックが、『ル・フィガロ』紙そのものの性格と、話者の「記事」の具体的な細部との対応を指摘しながら批判する場面である。

「君も『ル・フィガロ』に記事を書いていたことは知っていたよ」と彼 [=ブロック] は私に言った。「でも、君に話すべきではないと

思ったんだ。君が不愉快な思いをするのではと思ってね。だって友人が経験した恥ずかしい出来ごとを本人に言うべきではないだろう。それに明らかにそうだろう、サーベルと灌水器の新聞に、午後五時のお茶会 five o'clock を、聖水盤 bénitier まで忘れずに書くなんて。」<sup>22)</sup>

「サーベルと灌水器の新聞」という語は、当時の『ル・フィガロ』の社交的色彩、すなわち、軍隊・教会関係者の消息を知らしめる新聞としての特徴を示している。「午後五時のお茶会 five o'clock」、「聖水盤 bénitier」という表現にも注意したい。「模作」は、「午後五時のお茶会」そのものではないが、ヴェルデュラン夫人の夜会を描いたものであり、『ル・フィガロ』に相応しい「社交記事」である。「聖水盤」という言葉そのものも「模作」にはないが、「聖処女の戴冠を描いた井戸の縁石」(nP. IV, 288)、「ある種の水盤 une certaine vasque」(nP. IV, 295)という表現が呼応するとは考えられまいか。いずれにしても、「模作」が「記事」と密接な関係にあることは、このブロックの言葉によって明らかになる。そもそも、ブロックのこの言葉は、ブルーストのゴンクール賞受賞を「酷評」した新聞記事を利用して書かれたものだからだ。

「彼 [=ブルースト] は [...] 作家の評判が、午後五時 five o'clock の時報に基づいて形成された頃の、そして、名誉と金銭を欲する文人が、その筆を注意深く紅茶ポットと聖水盤 bénitier の中に交互に浸さねばならなかった頃の社交人なのだ。」<sup>23)</sup>

ブルーストを、「社交人」として、「午後五時 five o'clock の時報」すなわち「お茶会 five o'clock のはじまりを告げる時の鐘」と「聖水盤 bénitier」の作家としている点が、先に引用した、話者に対するブロックの批判と完全に一致していることから、この「ブルーストのゴンクール賞受賞を批判する記事」を元にしてブロックの言葉が書かれたことは間違いない。

よって、ブロックが批判する話者の「記事」に、ゴンクールの要素が反映していたとしても何ら不思議はあるまい。

### I-3. スワンを否認すること、あるいはスノビズム

「スワンの名」に関しても不可解な点がある。この不可解さが、「記事」が「模作」であると考えることによって説明可能なものとなるのだ。

まず、問題となる部分を簡単に紹介しておこう。ゲルマント邸には、話者の幼なじみのジルベルト・スワンが来ており、父親の姓スワンを名乗らず、母オデットが再婚した貴族の姓、ド・フォルシュヴィルを名乗り (nP. IV, 154)、もはや誰も彼女の前でスワンの名を口にしなくなっていた (nP. IV, 162)。ジルベルトがサロンにあるエルスチールのデッサンに気づくと、侯爵夫人はそれを買うよう勧めたのは「あなたの父親 [=スワン] だ」と口にしかける。その言葉が聞こえなかった話者はエルスチールの話を始め、侯爵夫人は絶望した様子を見せる。話者は話を続け、『ル・フィガロ』に載った自分の「記事」の中でエルスチールに触れたと言った (nP. IV, 163) ので、侯爵が「記事」を読もうとすると、夫人は「後にするよう」に言う (nP. IV, 163)。ジルベルトが帰った後、侯爵夫人は「私の合図が分からなかったのね。あなたがスワンのことを話さないように合図したのよ」と話者を非難するが、話者が詫びたので、彼女は話者の失敗を軽いものにしようとして、「逆らい難く、誰にでもありがちな傾向」に話者が従ったのだと信じる振りをした (nP. IV, 169)。さて、なぜ侯爵夫人は、話者がスワンの名を口にすると思ったのだろうか。話者はエルスチールの話をしたのであって、スワンの名を口にしてはいない。確かに話者はジルベルトがスワンの姓だった頃の友人であるから、侯爵夫人が、ジルベルトに、「あなたのお父様」と言いかけた時、話者がスワンについて話し始めるのではないかと夫人は恐れたとも考えられよう。しかし、夫人は話者に対して、「まあ！あなたはド・フォルシュヴィルのお嬢さんともうお会いになったことがあるのね」<sup>24)</sup>と尋ねたのだから、話者がジルベルトをスワンの娘として知っていることを夫



人は知らないのは明らかであり、この解釈は成り立たない。

話者が侯爵夫人の非難に対して詫びるということも不可解である。スワンについて語ろうとしたことを、話者自身も認めているかのようだ。なるほど、以前ゲルマント邸で、エルスチールの描いた『アスパラガス』について、侯爵が、侯爵夫人の前で、話者に、スワンがこの絵を侯爵に買わせようと思っていた、と言った（nP. II, 790-791）ことを夫人は覚えていて、話者がその話をするのではないかと恐れたとも考えられよう<sup>25)</sup>。しかし、侯爵夫人の非難に詫びる話者に対して、夫人は「逆らい難く、誰にでもありがちな傾向」に話者が従ったと信じる振りをした、という文章からは、エルスチールやスワンとの関係は見出せない。ではなぜ、話者がスワンについて話す、と夫人は思ったのか。

侯爵夫人は、「記事」つまり「模作」を読んでいたのではないか。その中にエルスチールだけでなく、スワンも描かれている（nP. IV, 289, 293-295）ことを知っていたので、話者が、「逆らい難く、誰にでもありがちな傾向」に、つまり、権威ある著名な『ル・フィガロ』紙に自分の「記事」が掲載されたので、それについて話したいという「スノビズム」に負けて、エルスチールの名を「記事」と結びつけて口にする<sup>26)</sup>や否や、スワンについて話し始めることを夫人は恐れたとしか考えられまい。

侯爵が「記事」を読もうとした時、「後にするよう」に言う（nP. IV, 163）のも、彼女自身が「記事」の中にスワンが描かれていることを知っていて、ジルベルトが、侯爵の読む「記事」の中にスワンの名を認めることを恐れたからであろう。

この場面の基調が「スノビズム」であることから、「記事」が「模作」であれば、この場面が、より効果的な構成を有することになる。先に見たように、ゲルマント侯爵夫人は、かつて死に瀕したスワンを冷たくあしらったことに対する後ろめたさから、彼の娘ジルベルトに対して優しく振舞い、彼女の前でスワンの名が出ることを恐れる。一方、ユダヤ人である父親ス

ワンを否認し、貴族の姓を名乗るジルベルト。有閑階級を代表するゲルマント侯爵は、自らは何もしない人間であるにも拘らず、「偉ぶった無用の人間」を非難しながら、「十本の指を使って仕事をする」話者を褒める。ドレフュス派のユダヤ人であるブロックにいたっては、反ドレフュス派の象徴である「サーベルと灌水器」の新聞に自分の記事が掲載されたと語るとは、まさに「恥」以外の何物でもないにも拘らず、有名新聞の魅力に抗えなかった彼の姿が、滑稽さを通り越して「哀れ、惨め」にすら見えるのだ<sup>27)</sup>。

それゆえ、「記事」が『ゴンクール未発表日記』の模作であれば、この場面の構成が一層効果的なものになる。「模作」はサロンの皮相を美辞麗句でつづったものだからだ。プルーストはこの効果を狙い、「模作」を「記事」とする予定だったのではなかろうか。

#### I-4. 「シャトーブリアンの流行遅れの散文に見られるような誇張や隠喩」が在る文体の「やや紋切型の表現」

「記事」の特徴を示す語句として、最も謎めいているものが、ゲルマント侯爵の批判である。

「彼 [=ゲルマント侯爵] は「シャトーブリアンの流行遅れの *démodée* 散文に見られるような誇張や隠喩」が在るこの文体の、やや紋切型の *poncive* 表現を残念がった。」<sup>28)</sup>

この「シャトーブリアンの誇張や隠喩」、「紋切型の表現」が「模作」に現れているならば、「模作」が「記事」であることを示す証拠となりえよう。しかし、『失われた時』の印刷稿においてすら、この表現の正体は明記されていないのだ。では、この場面の生成過程を調べることによって、その正体を探ることができないだろうか。この文章が初めて現れたのは、清書カイエ XIV においてである<sup>29)</sup>が、この文章は同カイエの中で大幅に書き加えられた部分<sup>30)</sup>に属し、執筆期は1917年以降であるとしか言えないので、「シャ

トーブリアンの誇張や隠喩、「紋切型の表現」の正体を探るには、1917年以降の書簡集を手がかりとするしかあるまい。

実際、書簡集を調べてみると、1921年8月末頃<sup>31)</sup>に書かれた手紙のなかに、プルーストがシャトーブリアンに関する何かを調査しようとしている形跡が見られる。『新フランス評論誌』の秘書トロンシュに、プルーストはサント＝ブーヴ著の『シャトーブリアンと帝政期におけるその文学グループ』を届けるよう頼んでいたのだ。この書物の中に、プルーストは問題の「シャトーブリアンの誇張や隠喩」、「紋切型の表現」を見出し、あるいは確認し、「記事」が「模作」であることを示唆するヒントとして用いたのではないか。

#### I-4-1. 「シャトーブリアンの流行遅れの散文に見られるような誇張や隠喩」あるいは「赤い花崗岩の柱」

サント＝ブーヴはこの書物の中で以下に引くシャトーブリアンの文章を引用している。

「[午後] 七時。我々の薪が照り返し、遠くまで広がる。[…] 間近にある木々の幹は、赤い花崗岩 granit rouge の柱のようにそそり立っている。」<sup>32)</sup>

ここに現れた「木々の幹」を「赤い花崗岩 granit rouge の柱」に譬えるシャトーブリアンの比喩こそが、プルーストにゲルマント侯をして、「シャトーブリアンの」「誇張や隠喩」と言わせる契機となったものではないか。そして、この「誇張や隠喩」に相当するものが、以下に引く「模作」の冒頭に在る「塔を塔の形をした菓子に譬えた部分」(nP. IV, 287-288)ではなからうか。

「黄昏時にトロカデロの塔の近くでは光の最後のきらめきのようなものがあり、その最後のきらめきで塔を、いにしへの菓子職人が作

る、[赤い] スグリのゼリーを塗った塔 [の形をした菓子] と全く同じものにしている。」<sup>33)</sup>

下線を付した部分を我々が「シャトーブリアンの隠喩」とする理由は、単に、「時刻が夕方であること」、「柱状のものに光が反映し赤くなっていること」が両テキストの共通点であるからだけでなく、『失われた時』の本文中に「花崗岩 granit」と、「グラニテ granité」つまり「シャーベット sorbet の一種」とが結びつけられた場面が存在し、その場面において、話者が「模作」としての「記事」を書くことを、そしてその「記事」の中でこの「表現」を用いることを暗に予告しているとしか思えない文章が存在するからである。

#### I-4-1-1. 「アルベルチーナのアイスクリーム」

すなわち、話者から文学的影響を受けたアルベルチーナが語る「アイスクリーム」(nP. III, 635-638)には、薔薇色の「フランボワーズ framboise」でできた「オベリスク obélisque (塔)」の形をしたものがあり (*ibid.*)、  
「非常に一貫性のある数々の比喻によって par images si suivies」(*ibid.*)、建造物としてのオベリスクの素材である「薔薇色の花崗岩 le granit rose」(*ibid.*) が言及されるのだ。

「グラニテ・フランボワーズ granité framboise」つまり「薔薇色の氷菓」に、この「薔薇色の花崗岩 le granit rose」という表現が重ね合わされていることは間違いない。彼女の言及する「薔薇色の氷菓」つまり「オベリスク」の形をした「フランボワーズ・アイスクリーム」は、「模作」の元のテキストであるゴンクール『日記』に描かれた表現、「夕焼けに染まるオベリスク」、「薔薇色 la couleur rosée」の「シャンパーニュ・シャーベット un sorbet au champagne」<sup>34)</sup>とほとんど一致することから、「アルベルチーナのアイスクリーム」と「模作」との関連は容易に想定できよう<sup>35)</sup>。

さらに、この場面において、後に話者が「模作」である「記事」を書く

ことを予告していると考えることによって、アルベルチーナとの会話に関する話者の妙な言い訳の理由が、説明可能となるのだ。

「あたかも見知らぬ誰かが私に、会話の中に文学的表現を決して用いてはならないと禁じていたかのように、私が決して口にしたことがなかったような言葉を用いて […アルベルチーナは…] 私に答えた。 […] 会話のなかで、非常に書き言葉的なイメージを彼女が急いで用いるのを見て、[私と彼女の未来は同じではない] とほとんど予感に近いものを感じた。そしてこれらのイメージが、まだ私の知らなかった、そして、より神聖な別の用途 un autre usage plus sacré et que j'ignorais encore のために、私に対して取っておかれているようだった。」<sup>36)</sup>

話者にとっては、「会話の中に文学的表現を決して用いてはならない jamais user dans la conversation de formes littéraires」のであるにも拘らず、彼女が用いた「非常に書き言葉的なイメージ」を、話者は「まだ知らなかった」「別の用途」に将来用いることになる。ということは、話者が偽ゴンクールとして、まさしく「芸術のお喋り le bavardage artiste」(nP. IV, 289)に他ならない社交記録すなわち「模作」を書き、その中で、アルベルチーナの用いたイメージを使うこと、つまり「塔」を「赤い菓子」として描く(nP. IV, 287-288) ことだったのではないか。

#### 1-4-1-2. 今は亡きスワン、「神聖な用途」、「鑄型」あるいは「流行遅れの紋切型」

加えて、「アルベルチーナのアイスクリーム」の場面で、問題の「イメージ」を「まだ私の知らなかった」「より神聖な別の用途」に当てるということは、今は亡きスワンを、「鑄型」と関係させて、「記事」の中に話者が書きこむことを予告するものだと思われるのだ。なぜなら、話者自身が「ア

ルベルチーヌのアイスクリームの鑄型」とスワンの死とを結びつけて語っている (nP. III, 704-705) からである。

さらに、この「アルベルチーヌのアイスクリームの鑄型」に、ゲルマント侯の言う「やや紋切型の表現」が密接に関係するのではないか。すなわち、「アイスクリームの鑄型」と「模作」の注釈部との呼応を探ると、芸術作品における「古い」「紋切型」つまりは「鑄型」の存在が確認され、「模作」の注釈部に在るこの「紋切型」に関する文章によって、「記事掲載日」のゲルマント侯の言葉・反応が説明可能となるのである。

では、まず「アイスクリームの鑄型」と「今は亡きスワン」との関係を確認しておこう。

「[...]侯爵の称号がついていることが、[ユゼス侯の]諸要素 les éléments を、暫くの間、全体としてとどめるのである。ちょうどアルベルチーヌが賞賛していた、あの、うまくデザインされた様々な形のアイスクリームのように。一方、超社会的なブルジョワは、死ぬや否や、崩壊して溶ける。「鑄型からはずされる」のである。[...スワンは]何も [作り出] しはしなかったけれども、彼は幸いにも少し生き延びた。[...]話者] が、[スワン] を、[話者] の小説の中の一巻の主人公にしたからこそ、人々は [スワン] のことを再び話し始め、そしておそらく [スワン] は生き続けるのだろう。」<sup>37)</sup>

鑄型から出ると溶け始めるアイスクリームのように、人間は死ぬとその同一性を保証するものが無くなっていく。人々の記憶の中で同一性が歪められていくのである。しかし、芸術作品の中にその姿がとどめられることによって僅かばかりの延命が得られるのだ。

つまり、芸術作品の中で生き延びるスワンは、まだ鑄型から取り出されたばかりのアイスクリームのように、己の「諸要素 les éléments」を保持

しているのである。

さて、下書き段階において「模作」に位置的に先立つ、あるいは「模作」を結論づける部分では、話者が「模作」を読んだ結果、スワンらが有名であることに驚き、その一理由として以下の文を書き加えるようメモされていた<sup>38)</sup>。

「時は […] 人々の個別性を非常に速く飲み込むので、数年後、 […] スワンが社交界で或る地位を占めていたことなど誰も知らないのだ。敬虔な pieux 人々を感動させる『回想録 [= 「模作」]』が語る、この忘却、この諦めは、まさに忘却が止まっているこの回想録の中において、想像以上にリアリティーがあるものなのだ。」<sup>39)</sup>

つまり、この文章が書かれた時点では、「スワンの一面がとどめられること」と「彼が忘れ去られること」とが「模作」によって明かされる予定だったのだ。

しかし、「模作」の最終稿にこの文章は無い。その代わりに、『囚われの女』最終稿において、この計画が「スワンの死亡記事」により明確に示されるのだ (nP. III, 704)。さらに、下書き段階における「社交界の寵児としてのスワンが描かれ、敬虔な pieux 人々を感動させる模作」に呼応するものが、『囚われの女』では、「神聖な sacré 用途」として「鋳型」を用いて話者がスワンの「諸要素」を書き込むことになる「記事」つまりは「模作」として予告されているのではなからうか。

また、I-1-3.に見たように、「記事掲載日」に、話者が「エルスチール」の名を口にしたにも拘らず、彼が「スワン」の名を口にしそうになったとゲルマント侯爵夫人が言う理由として、我々は「記事」に「スワン」が書き込まれていたからではないかという仮説を立てた。この仮説が「アイスクリーム」の場面においても認められることから、「記事」の正体は、やはり「模作」であると考えられないだろうか。

今度は「アイスクリームの鑄型」と『見出された時』に在る「模作」の注釈部との呼応を検討しよう。プルーストは単にスワンと「鑄型」とを結びつけていただけでなく、絵画芸術をも考慮し、モデルとなった人物の「延命」を考えていたことは間違いない。若干の混乱はあるものの、チソが描いたサロンの中のシャルル・アース（実在の人物）が、あるいはスワンが、後に語り継がれることを、「スワンの死亡記事」の挿話の最後に、例として話者に付け加えさせている<sup>40)</sup>ことから、それは明らかである。

「模作」の注釈部においても、当時のサロンを描く画家とそのモデルが例に挙げられ、「無名画家」が用いる「古びた優雅さの紋切型 un poncif de grâce surannée」（nP. IV, 300）の介在が強調されている。この注釈部でプルーストは、「スワンの死」と結びついた、アルベルチヌの欲しがる「流行遅れの型 moules démodéesで作られた」アイスクリーム（nP. III, 636）に現れた「鑄型 moule」の存在を示唆しているのではなからうか。というのは「模作」の注釈部において、人々の中から「エレガンスの諸要素 les éléments」を拾い集め、溶け崩れないように、「鑄型」である「古びた優雅さの紋切型」を用いて「肖像画」の中に固定することが言及されているからだ。

「エレガンスの最も偉大な映像を我々に与えた芸術家達が、エレガンスの諸要素 les éléments を人々の中から拾い集めるのだが、そういった人々が、時代の最もエレガントな人々であることは希だ。なぜならその時代で最もエレガントな人々は、自分たちが画布の上に見分けることのできない美の、そして民衆の目の中に漂っている古びた優雅さの紋切型 un poncif de grâce surannéeの介在によって隠されている美の担い手である無名の画家に、肖像画を描かせることがほとんど無いからである。」<sup>41)</sup>

これらのテキストと同様に、ゲルマント侯の言う、「シャトーブリアンの流行遅れの démodée 散文に見られるような誇張や隠喩」のある文体の「や



や紋切型である poncive 表現」に、「古さ」、「紋切型（鑄型）」という概念が現れていることから、ゲルマント侯の言葉が「模作」とその注釈部とに呼応していると言えよう。すなわち、「模作」に現れた「いにしへの ancien 菓子職人の手によって作られた、塔形の菓子」を作るときに用いられる「鑄型 moule」と、「模作」の注釈部に描かれた「古びた優雅さの紋切型 un poncif de grâce surannée」とに、ゲルマント侯の言葉が関係しているのだ。

加えて、「模作」の注釈部で述べられているように、「その時代で最もエレガントな人」が「ある種の美」を見分けることができない理由は、その美が「古びた優雅さの紋切型 un poncif de grâce surannée の介に負っている」（nP. IV, 300）からだという文章の実例に相応しく、「記事掲載日」に、「その時代で最もエレガントな人」であるゲルマント侯は、「記事」すなわち「模作」に在る「シャトーブリアンの流行遅れの散文」にあるような「紋切型の poncive 表現」に「美」を見出すことができないどころか、逆にその「表現」を短所として残念がるのだ（nP. IV, 169）。

以上から、ゲルマント侯の言う「シャトーブリアン」の「誇張や隠喩」とは、「模作」冒頭の「夕日を浴びた塔を、いにしへの菓子職人が作る塔の形をした菓자에譬えた部分」であり、「紋切型」とは、この菓子を作る時に用いられる「鑄型」に譬えられるものであると同時に、芸術作品の中に見出される「古さを伴う紋切型」であろう。この「紋切型」の特徴が、「模作」の注釈部において述べられているので、ゲルマント侯の「記事」に対する不可解な感想、反応の理由が説明され、「記事」が「模作」であることの状況証拠となるのではないかと我々は考えるのである。

#### I-4-2. チザンヌの染みのある封筒

時期的に見ても、「アルベルチーヌのアイスクリームの鑄型」、「模作」、「記事」は、密接に関係している。なぜなら、プルーストは死の直前（1922年11月18日）に、セレスト・アルバレに「アルベルチーヌのアイスクリームの鑄型」についてのメモを書き取らせ<sup>42)</sup>、さらにそのメモを入れた「チザ

ンヌの染みのある封筒」の上に、同時期にプルースト自身が、「模作」が「記事」であることを示唆するメモを残しているからだ。

そもそもこの「封筒の上に書かれたメモ」は、『消え去ったアルベルチーナ』の続巻の構成に関するものであり<sup>43)</sup>、モーリアック＝ダイヤー氏の言葉を借りるならば、『ル・フィガロ』に主人公の記事が掲載された朝、「記事」掲載の反響を知るため、引き続いてゲルマント家を訪問、侯爵の反応に失望させられ、フォルシュヴィルとなったジルベルト・スワンに驚かされる、[…]若い夫婦のタンソンヴィルでの生活<sup>44)</sup>が記されている。つまり『逃げ去る女』から削除された部分を『見出された時』の冒頭にある「タンソンヴィル」の章と組み合わせることを意味していることは間違いない<sup>45)</sup>。だとすると、「タンソンヴィル」の章に存在する「模作」が、「記事」となる運命だったと考えれば、「記事掲載の反響」と、「記事」そのものである「模作」とを結びつけて一章にまとめるという至極当然な発想が描かれていることになるのである。もはや「記事」の正体は「模作」以外には考えられない。

次稿では、「模作」が「記事」であることを証明するために、生成学的観点から、特に「修正マルタンヴィル」を考察せねばならない。というのは、「模作」と「記事掲載の反響」が描かれた部分の、それぞれの生成過程を調べることによって、どの時点から、「模作」と「記事」とが接点を持つようになったのかを把握できる可能性があるからであり、また、「記事」は当初、「マルタンヴィル」を修正したものとして構想されていたので、その構想は、「模作」が「記事」であることとは対立するかのようと思われるからだ。よって、「模作」が「記事」であることと、「修正マルタンヴィル」が「記事」であることとの時期的関係を検討することによって、「模作」としての「記事」に関する指標の存在を探ってみたい。

## 注

1) 以後、『失われた時』と略記する。引用に際しては Gallimard 社の新ブレイアッド版（第一巻1987年、第二巻1988年、第三巻1988年、第四巻1989年版）を用い、nP. と記し、巻数をローマ数字で、頁数を算用数字で示す。主としてこの版を使用する理由は本論「序」の最後に述べる。本論で触れる原稿類は可能な限りパリ国立図書館所蔵のマイクロフィルムを参照した。その際に付した頁は、同図書館の foliotage に従い、ro はカイエを見開きにした時の右側の頁を示し、vo は左側の頁を示す。

本文中の原綴表記、及び注における原文引用は、字数の関係上、制限せざるを得なかったことを了承されたい。なお、注の中で引用する文献は、〈引用文献〉と記し、本稿最後に付した〈引用文献〉の番号を付す。

2) 現在、『囚われの女』、『消え去ったアルベルチーナ』（あるいは『逃げ去る女』）、『見出された時』と呼ばれるテキストである。ブルーストが死んだとき、『囚われの女』はタイプ原稿であり、『見出された時』は清書カイエの状態だった。

『囚われの女』に直結し、タイプ原稿の状態にあるテキストが『消え去ったアルベルチーナ』（あるいは『逃げ去る女』）なのであるが、この巻に関しては、その題名に関する問題とともに後に略述する。なお、この巻に関する草稿類を生成過程の中に位置づけて簡単に紹介したものが、フォリオ版『消え去ったアルベルチーナ（『逃げ去る女』）』の「序」、p. XIV, note 2. にあるので参照のこと。

清書カイエは20冊（パリ国立図書館による分類番号 NAF, 16708-16727）あり、『ソドムとゴモラ』から『見出された時』までの清書であり、75冊の「下書きカイエ」と区別するためローマ数字を用いる。清書カイエは右側の頁（ro）のみが使用され、加筆が施される際は、下書きカイエと違って左側の頁（vo）は用いられず、貼つけ紙、挿入紙が使用された。

一般に、ブルーストは『失われた時』を執筆する際、メモ⇨下書き⇨下

書きの組み合わせ⇒清書⇒タイプ原稿⇒校正刷りの段階を経るが、各段階が繰り返されることもあれば省かれることもある。原稿類の概略一覧表が Madame Callu によって、nP. I ,CXLVII-CLXIX に掲載されているので参照のこと。

3) 中野氏は、Nathalie Mauriac-Dyer 氏同様、タイプ原稿(オリジナル)を『消え去ったアルベルチーナ』と呼び、一方、清書カイエ状態にあり、削除される前の該当部分を『逃げ去る女』と呼んでいる。この点については次注4)、6)を参照のこと。

4) 〈引用文献〉8.の第一巻、第三部《Le destin de l'article du Figaro et son impact dans l'esthétique romanesque》,pp.380-487あるいは〈引用文献〉9.特にpp.115-116を見よ。同じく〈引用文献〉10.も参照のこと。中野氏は、午後のゲルマント邸にかかわる部分を除き、〈引用文献〉8.の第一巻、pp.393-418、及び〈引用文献〉10.で、「記事」の生成過程を分析している。現時点で、中野氏以外に「記事」の生成過程を詳細に検討した研究者はいないようだ。

『逃げ去る女』をタイプしたものからの削除部分に関しては新プレイアード版の「解説」「注」等で述べられているが、誤植も含めその誤りを指摘した〈引用文献〉3.も参照のこと。

5)《On ne saurait dire [ ... ] s'il [ Proust ] a l'intention de le [ l'épisode du Figaro ] placer ailleurs dans le roman, en l' [ l'épisode du Figaro ] effaçant simplement dans la dactylongraphie corrigée d' Albertine disparue . (〈引用文献〉10. p.168)。

6) 清書カイエ状態においては『見出された時』までテキストは一応連続した形を取っているが、Mauriac Dyer 版の『消え去ったアルベルチーナ』は『見出された時』との連続性はない。彼女によれば、『消え去ったアルベルチーナ』と『見出された時』との間に、『ソドムとゴモラIV』が巻として作成されるはずだったので、『見出された時』と『消え去ったアルベルチーナ』の続巻』とは別のテキストなのだ(〈引用文献〉3.)。

『逃げ去る女』のタイプ原稿については、以下に引く二書簡からその作成時期が明らかにされている。まず、1922年1月18日付、ガリマール宛の書簡で、『逃げ去る女』の直前に位置するテキスト（この時点では『ソドムⅢ』と呼ばれていた）が、まだ手書き原稿状態にあるので、それをタイプさせることをプルーストは提案している（〈引用文献〉11.第21巻、pp. 39-40）。つまりこの時期はまだ、タイプ原稿を作成していない。

次に、1922年6月25日付、同じくガリマール宛の書簡でプルーストは、『囚われの女』と『逃げ去る女』のタイプ原稿を持っていると言う（〈引用文献〉11.第21巻、pp. 310-311）。

よって1922年1月末から6月25日までの間に『囚われの女』と『逃げ去る女』とのタイプ原稿が作成されたのである。タイプストの Ybonne Albaret に関しては、〈引用文献〉11.第21巻、pp. 60, n. 1) sur la page 66, etc. 参照のこと。

7) 〈引用文献〉4.を見よ。プルーストが死んだとき、この「封筒」以外にも多くのメモ、特に「下書きカイエ59,60,61,62」に書かれたメモが大量に残されており、「封筒」のメモだけが小説に取り込まれ実現されると考えることには無理があるという意見もあろう。この「封筒メモ」の有効性に関しては、本論 I-4-2. で触れる。

8) タイプした時期に関しては注6) 参照。

9) 〈引用文献〉5.を見よ。

10) 以上、『消え去ったアルベルチーナ』の「正真性」に関する論議は、前掲の Mauriac-Dyer 版『ソドムとゴモラⅢ』に付された Bibliographie (pp. 63-64) に挙げられた各氏の論文を参照のこと。徳田陽彦氏の論文は、〈引用文献〉14.を見よ。

11) NP. I, 179-180. 以後、「マルタンヴィル」と略記。

12) 小説中では二ヶ所 (nP. II, 691-692; nP. III, 523) で言及されるのみ。

『模作と雑録』所収の「自動車旅行の日々」に付された「註」(note de 《Journées en automobile》), Pastiches et mélanges, suivi de Contre

Sainte-Beuve, Gallimard, collection de la 《Pléiade》, 1971, p. 64) において、酷似したことが述べられているが、詳細については次稿で触れる。

13) 注16) を見よ。

14) 作成時期の決定の根拠については注6) 参照。

15) 以後、「模作」と略記する。「模作」は、それまで話者が語ってきたヴェルデュラン家のサロンを、ゴンクールという違った視点から描いたものとして『見出された時』の冒頭に置かれている。話者が語ってきたサロンとは、第一巻『スワン家の方へ』でのパリ、モンタリヴェ通のサロン、第四巻『ソドムとゴモラ』での避暑地ラ・ラスプリエールのサロン、第五巻『囚われの女』でのパリ、コンティ河岸のサロンである。新ブレイアッド版『見出された時』の解説 (nP. IV, 1168-1169) では、『囚われの女』でプリショがかつてのヴェルデュラン家のサロンを語ることから、「模作」以前に、サロンは読者には四度示されるとしている。これらのサロンの比較検討は稿を改めて論じたい。

16) 《A propos d'Elstir je l'ai nommé hier dans un article du Figaro. Est-ce que vous l'avez lu?》 (nP. IV, 163) .

17) 《“Vous avez écrit un article dans le Figaro?” s'écria M. de Guermantes avec la même violence que s'il s'était écrié : “Mais c'est ma cousine.”》 ibid. なお、本論で引用する「記事」関係のテキストで、タイプ原稿でのタイプミスはこの箇所と注24) に記したゲルマント侯爵夫人の言葉に付されるべきであった《?》だけである。

ここ (nP. IV, 163) では《C'est une cousine》とタイプされ《C'est ma cousine》と修正されている (fo 46, 2 e volume de la dactylographie corrigée par Robert Proust, NAF, 16749)。

18) 新ブレイアッド版の注 (nP. IV, 1195, note 1, sur la page 293) にあるように、「模作」の中の『コタール家の肖像』を描写した部分と、『ゲルマントの方II, II』で言及される、ゲルマント侯爵邸にあるエルスチールの絵の草稿段階の描写 (nP. II, 1241) とは酷似しており、両者は共に、ルノ

アール作の『シャルパンチエ夫人とその子供達』をモデルとしていると思われる (Cf. nP. II, 1941, note 1 sur la page 1241)。詳しくは次注19) 及び次稿の「模作」の生成過程に関する考察を見よ。

19) 新プレイアド版未収の草稿で、コタールが描かれている二枚の絵がリュクサンブール美術館にあることを記したメモが、下書きカイエ74の「模作」用のメモの中にある (『X家の肖像』は『XXX家の肖像』となっているが)。

《Pourtant Cottard n'étant pas un modèle ordinaire comme le spectateur aurait pu le croire s'il avait vu au Luxembourg que la Famille XXX (la Famille Cottard). Sa présence, et t[ou]t à fait à part, dans le tableau populaire [ : ] 《Les Plaisirs de la Danse》, dirigeait assez l'ami, l'ami brillant [ , ] protecteur de l'artiste》 (marge gauche du fo 82 ro du Cahier 74) .

このメモは『XXX家の肖像 (コタール家の肖像)』に関してのみ、「模作」最終稿の中で生き延びている (nP. IV, 293)。『XXX家の肖像 (コタール家の肖像)』と『ダンスの楽しみ』の両者がともに関係する部分としては、「記事」掲載当日のゲルマント邸でのエピソードに呼応する箇所が、『ゲルマントの方II, II』 (nP. II, 790) と『囚われの女』 (nP. III, 905-906) とにある。『ゲルマントの方II, II』では、ゲルマント侯爵が、コタールらしき人物がエルスチールの庇護者で、その絵の中に描かれていることを語っており、この二枚の絵は、『囚われの女』の中で話者が想起していたように、『ダンスの楽しみ』と『X家の肖像』なのだ。

20) 同一の絵に関して、別々の所有者がいると言うことは、時期が違えばあり得ることだ。しかし、同一の絵を、別々の所有者が、同一の美術館に寄付することは不可能であり、したがって、『失われた時』という小説世界の出来事と、その小説に現れる「模作」の中に描かれた出来事とが矛盾するのである。

21) なるほどブルーストは、「模作」と小説本文とにおいてエルスチールに

別々の愛称を与えることによって、話者が「模作」を読む時に、エルスチールこそが、ヴェルデュラン家に入り込んでいた頃にスワンを不愉快にさせていた人物だったことが明らかになる小説展開を考えていた。

« [L] e Journal des Goncourt m'avait fait découvrir qu'il n'était autre que le « monsieur Tiche » qui avait tenu jadis de si exaspérants discours à Swann, chez les Verdurin ». (nP. IV, 298)  
つまり、偽ゴングールの語る事柄と話者のそれとが異なるように描く予定だったのだ。

« Pour eux [= Elstir et d'autres ], que ce soit les mémoires [ pastiches de Goncourt ], ou nous [= Narateur ], qui aient tort [ ... ], est un problème de peu d'importance ». (Cahier XV, fo 94 : nP. IV, 298)

『見出された時』の中に在るこれらの文章は、下に引く、『ソドムとゴモラ II, II』(以後『ソドム』と略)の清書カイエのメモに書かれたプルーストの意図と合致している。すなわち、「模作」の中で使用するエルスチールの愛称ティッシュを、小説そのものである『ソドム』の中では用いないよう注意することを指示したメモの内容と呼応するのだ。

« NOTA BENE. Ne pas dire dans ce volume que Mme Verdurin l'appelait M. Tiche, [ ... ] Et [ cette ] chose pour le pastiche de Goncourt, [ ... ] ».

(mg. du fo 90 du Cahier V : nP. III, 1532, n. e sur la page 333)  
しかし、これらの計画は遅くとも『花咲く乙女たちの陰に』が印刷された時点(1918年11月30日)で無効になったのではないか。なぜならこの巻で、エルスチールは、『スワン家の方へ』の中のヴェルデュラン家のサロンにおいてピッシュと呼ばれていた(nP. I, 200)のと同様、ピッシュと呼ばれ、かつてヴェルデュラン家に入り込んでいたことを話者に対して認め(nP. II, 218)、彼が滑稽で退廃的な画家であったこと(ibid.)が明らかにされるからだ。つまり、話者は、『見出された時』において「模作」を読むのを



待たずして、エルスチールの別の一面を知るのである。ピッシュ、ティッシュの違いを含め、以上の点については次稿で詳細に検討する。

22) 《J'ai su que toi aussi, me dit-il [= Bloch] , avais fait un article [ dans le Figaro ] . Mais je n'avais pas cru devoir t'en parler, craignant de t'être désagréable, car on ne doit pas parler à ses amis des choses humiliantes qui leur arrivent Et c'en est une évidemment que d'écrire dans le journal du sabre et du goupillon, des five o'clock , sans oublier le bénitier》 (nP. IV, 170 ; souligne par nous, sauf 《 five o'clock 》) .

23) 《 Il [= Proust ] est homme du monde [...] à une époque où la réputation des écrivains se fait sur le coup du five o'clock et où l'homme de lettre soucieux de gloire et d'argent doit tremper sa plume alternativement dans la théière et dans le bénitier 》 .

(〈引用文献〉 2. 下線引用者)

この新聞記事をプルーストは読んでおり、その酷評を書簡の中で繰り返して嘆いている (〈引用文献〉 11. 第18巻、 pp. 536, 539, 545 et 557) . 12月23日より少し前に書かれたとされる書簡 ( p. 545) では《 bénitier 》が、12月25日付の書簡では《 five o'clock 》が書面に現れている。

24) 《 Ah! vous avez déjà rencontré Mlle de Forcheville.》 (nP. IV, 153) . 清書原稿では《 ? 》で文が終えられている。Ybonne Albaretのタイプミスであろう。

25) たしかに、この「記事」掲載日のゲルマント邸がカイエ48に最初に書かれた時点では、スワンは、かつてゲルマント邸で話者が見たエルスチールの絵と関係することが示されていた。次稿参照のこと。

26) 注16) を見よ。

27) 以上の解釈の妥当性は、この場面全体の生成課程を調べることによって確認できるように思われる。鈴木道彦氏が既に指摘している (〈引用文献〉 13.) ように、社交界の場面は稿を重ねるにしたがって、「スノビズム」の深下、滑稽さの付与があり、この場面の生成にも同様の推移が見られる。

例えば、ゲルマント侯爵を形容する言葉である。話者が「記事」を書いたことに関して、侯爵が初めて描かれたとき、以下のように書かれている。

M. de Guermantes (à propos de l'article peut-être et sans doute parce qu'il est administrateur de tant de g[ ran ] des affaires ou pour se montrer de sa saillie [ ]) me dire [ sic ] : « J'aime qu'on fasse q.q.chose de ses 10 doigts. Je n'aime pas les inutiles qui sont toujours importants, des agites. Sotte engeance. [ sic ] » ( mg. du fo 45 ro du Cahier 56)

すなわち侯爵は有能な貴族《administrateur de g[ ran ] des affaires》として描かれており、さらにこの文に続いて、ジョッキー・クラブの会長の座を争ったことが描かれているのだ。しかし、清書カイエでは、この表現は消え、タイプ原稿においてはジョッキー・クラブの会長選挙に関する文章が、『囚われの女』の中に移された(Ⅲ, 548-550)のである。その結果、この場面のタイプ原稿では、ゲルマント侯爵は有閑階級を代表する一貴族となり、仕事をしない侯爵が話者の仕事を以下のように褒めることによって、「スノビズム」による滑稽さが強調される結果となったのだ。

Il me félicita sans réserve de « m'occuper » : « J'aime qu'on fasse quelque chose de ses dix doigts. Je n'aime pas les inutiles qui sont toujours des importants ou des agités. Sotte engenance! » (IV, 169)

ブロックが「記事」に対して口にする言葉も、生成過程初期においては話者の「記事」に対しての反論のみであった( ffos 2-5 ros, 6 ro, 8-10 ros du Cahier 58)。しかし、清書カイエでは、「ドレフュス事件」が背景に置かれ、この登場人物が戯画化されることになる。

28) « Il [= le duc de Guermantes ] regrettait la forme un peu poncive de ce style où il y avait "de l'enflure des métaphores comme dans la prose démodée de Chateaubriand" » ( nP. IV, 169 ; souligné par nous).

29) Fo 30 ro du Cahier XIV.

30) 「記事掲載日」の生成過程を略述すると、第一段階は1908-1909年春に

かけて執筆された四冊の下書きカイエ3, 2, 5, 1に描かれている、「記事」掲載日の様子。第二段階は、下書きカイエ48に、1910年1月から11月にかけて、同じく「記事」掲載日の様子が執筆される。第三段階は1910年12月頃に執筆された、カイエ58冒頭の、「記事」掲載当日のブロックの反応。この段階では、「記事」は小説の最終場面に関係していた。第四段階は1913年春頃、カイエ57への加筆メモ。第五段階は、清書カイエ執筆（1916-1917年）と、カイエ38からの挿入と、その後の加筆期（1917-1922年）である（以上、〈引用文献〉8.第一巻、pp.393-418；〈引用文献〉10. pp.157-160を見よ）。

この第五段階の清書カイエ加筆期に「シャトーブリアンの表現」が初めて登場したのである。第五段階の初期、つまり清書カイエXIVの「記事掲載日」に該当する部分は、当初、「ゲルマント侯爵夫人が、エルスチールのデッサンを「エルスチールの絵」より好きだ」と言う部分から、「ジルベルトが、スワンが死と忘却の働きに拍車をかけ完遂させる」部分までが、現状の清書カイエXIVよりも短く単純に書かれていた。詳しくは次稿で検討する。

なお中野氏は、「サント＝ブーヴに反する理論・批評」を第二、第三段階における「記事」の正体として考察しているが、我々はこの立場を取らない。というのは、中野氏自身が指摘しているように、第一段階において、主人公が自分の「記事」が掲載されたことを知り、次の記事として「サント＝ブーヴに反する理論・批評」を書くことを意図するのであるから、一度目の「記事」であり続けた部分（『逃げ去る女』の「記事」に係する部分）が「理論・批評部」になるとは考えにくいからだ。

31) 〈引用文献〉11.第20巻、p.426.

32) 《Sept heure. [...] La réverbération de notre bûcher s'étend au loin; [...] les troncs des arbres les plus proches s'élèvent comme des colonnes de granit rouge》(〈引用文献〉12.第一巻、p.106.下線引用者).

33) 《[ P ] ar un crépuscule où il y a près des tours du Trocadéro comme le dernier allument d'une lueur qui en fait des tours absolument

pareilles aux tours enduites de gelée de groseille des anciens pâtissiers.》(nP. IV, 287-288)。

34) 《“Un ciel mauve, où les lueurs des illuminations mettent comme le reflet d’un immense incendie. [...] , une apothéose de la lumière blanche, au milieu de laquelle l’obélisque apparaît avec la couleur rosée d’un sorbet au champagne” (Journal de Goncourt, 6 mai 1889, [ Charpentier-Fasquelle de 1887 à 1896 ], t.VIII,p.51)》(nP. IV, 1190, note 1) sur la page 288 ; souligné par nous, sauf le titre 《Journal》。

35) この場面の模作的性格が、本論とは別の見地からではあるが、既に指摘されている(〈引用文献〉1.6. (p. 45) 及び7.) ことから『『ゴンクール未発表日記』模作』との関連が検討されるべきであろう。

36) 《[ Albertine ] me répondit par ces paroles [...] que [...] je n’aurais jamais dites, comme si quelque défense m’était faite par quelqu’un d’inconnu de jamis user dans la conversation de formes littéraire. [...] J’en [= de ce que l’avenir ne devrait pas être le même pour Albertine et pour moi ] eus presque le pressentiment en la voyant se hâter d’employer en parlant des images si écrites et qui me semblaient réservées pour un autre usage plus sacré et que j’ignorais encore.》(écrit par la main de Proust sur le fo 10 de la 3e dactylographie : nP. III , 635-636)。

37) 《[ L ] a couronne ducale en [= du duc d’Uzes ] tient quelques temps ensemble les éléments comme ceux de ces glaces aux formes bien dessinées qu’appréciait Albertine. Tandis que les noms de bourgeois ultra-mondains, aussitôt qu’ils sont morts, se désagrègent et fondent, 《démoulés》. [...] bien qu’il [= Swann ] n’eût rien 《produit》 il eut la chance de durer un peu plus. [...] c’est [...] parce que [ j’ai ] fait de vous [= Swann ] le héros d’un de [ m ] es romans, qu’on commence à parler de vous et que peut-être vous

vivrez.》( nP. III, 704-705 ; souligné par nous ).

38) 《 Dans le morceau qui précédera ou concluera ce pastiche, quand j'explique l'étonnement que ces gens soient célèbres, ajouter ces deux raisons 》. ( fo 76 vo du Cahier 55 : nP. IV, 1370 ).

39) 《 Le temps engloutit si vite les particularités [ ... ] des gens, que quelques années après tout le monde ignore qu' [ ... ] un Swann [ eut ] une situation mondaine. Cet oubli, ce renoncement dont parlent les Mémoires [= pastiche de Goncourt ] touchant les gens pieux est plus réel qu'il ne semble dans ces mémoires où précisément l'oubli cesse. 》 ( souligné par Proust ; fo 76 vo du Cahier 55 : nP. IV, 1370-1371 . Notre transcription est légèrement différente de celle de la nP ).

40) 《 Si dans le tableau de Tissot [ ... ] on parle de vous, c'est parce qu'on voit qu'il y a quelques traits de vous dans le personnage de Swann. 》 ( nP. IV, 705 ). Cf. nP. III, 1742, note 1) sur la page 705.

41) 《 Les artistes qui nous ont donné les plus grandes visions d'élégance en ont recueilli les éléments chez des gens qui étaient rarement les grandes élégances de leur époque, lesquels se font rarement peindre par l'inconnu porteur d'une beauté qu'ils ne peuvent pas distinguer sur ses toiles, dissimulée qu'elle est par l'interposition d'un poncif de grâce surannée qui flotte dans l'œil du public [ ... ] 》. ( ffos 97-98 ros du Cahier XV : nP. IV, 300 souligné par nous ).

42) この封筒及び封筒の中にあるメモは、Clayeux氏が所有するものであり、氏の許可を得てMauriac - Dyer氏が転写し、論じたものが(引用文献) 4. である (Mauriac - Dyer, note sur la Pris. p. 594, n. 1 sur la p. 262 in Sodome III )。また、nP. III p. 1667, n. 4 et var. a, p. 691 ; nP. III p. 1742, n. 1 sur la page 705も参照のこと。

43) 《 On peut [ ... ] considérer ces quelques lignes comme l'ébauche d'un 《 plan 》 pour la suite d' Albertine disparue 》 (引用文献) 5. p. 45,

強調は巻題を除いてモーリアック＝ダイヤー氏).

44) 《[ Ce qui est écrit sur cette enveloppe reprend la matière des épisodes ôtés dans Albertine disparue : ] matinée de la parution de l'article du héros dans Le Figaro, visite consécutive chez les Guermantes pour en juger de l'effet, décevante réaction du duc et surprenante rencontre avec Gilberte Swann devenue Forcheville, [ ... ] vie à Tansonville des jeunes époux》(〈引用文献〉5. p. 45). テキスト自体の転写は同頁 note 2に掲載されている

45) 《Dernier témoignage de ce vers quoi s'engageait Proust, l'« enveloppe souillée de tisane » semble bien faire trait d'union entre ce qui doit subsister, recomposé, de l'ancien récit — l'article du Figaro, Gilberte chez les Guermantes — et son point d'innovation : le séjour à Tansonville》(〈引用文献〉5. p. 47).

〈引用文献〉

1. Eells, E., 《Proust à sa manière》, Littérature, no 46, Larousse, 1982, pp. 105-123.
2. La Fouchardière, G. de, 《Cuisine électorale》, L'Œuvre, no du 12, décembre 1919.
3. Mauriac-Dyer, N., 《Les mirages du double : Albertine disparue selon la Pléiade (1989)》, BMP ( Bulletin Marcel Proust ), no 40, Societe des amis de Marcel Proust, 1990, pp. 117-153.
4. —, 《Sur une enveloppe souillée de tisane, un plan pour la suite d' Albertine disparue》, BMP, no 42, 1992.
5. —, 《Introduction》, Sodome et Gomorrhe III, La Prisonnière suivi de Albertine disparue. Le livre de poche, collection《Classique》, 1993, pp. 5-50.

6. Milly, J., Les Pastiches de Proust, Armand Colin, 1970.
- 7.—., « Cris de Paris et désir des glaces dans La Prisonnière », Proust dans le texte et l'avant - texte, Flammarion, 1985, pp. 135-155.
8. Nakano, C., De « La Fugitive » à « Albertine disparue » : le destin en eclipse de l'avant - dernier volume d' « A la recherche du temps perdu », 2 vol., thèse de doctorat, Université Paris IV, 1989.
9. —., « Le destin en eclipse de l'avant - dernier volume d' A la recherche du temps perdu », BMP, no 40, 1990, pp. 108-116.
- 10.—., « L'apparition de l' Albertine disparue de Grasset — le destin de l'épisode de l'article du Figaro », Etudes de langue et littérature françaises, no 58, Tokyo, 1991, pp. 154-169.
11. Proust, M., Correspondance de Marcel Proust, établie, présentée et annotée par Philip Kolb, 21 vol., Plon, 1970-1993.
12. Sainte - Beuve, C.A. de, Chateaubriand et son groupe littéraire sous l'empire, 2 vol., Garnier frères, 1948.
13. Suzuki, M., « Le Comique chez Marcel Proust », Bulletin des amis de Marcel Proust, no XI, 1961.
14. Tokuda, H., « Autour d' Albertine disparue », Etudes de Sciences humaines, no 90, mars 1991, Faculté des Sciences politiques, Université Waséda, Tokyo, pp. 181-194.